

佐多稲子 あとや先き



中央公論社

あとや先き

一九九三年四月一〇日 初版印刷
一九九三年四月二〇日 初版発行

著 者 佐多稲子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノハノ七

振替 東京二―三四

©一九九三 検印廃止

ISBN4-12-002212-9

Printed in Japan

目

次

I

老いの新年 9

正月に思う 14

原泉さん追憶 19

今年の信州追分 30

あとや先き 40

中野重治・原泉のこと 52

II

中野重治への手紙 57

中野重治への手紙について 88

中野重治への手紙をめぐって 96

中野重治への戦後の手紙

107

III

中野鈴子への手紙

141

インタビュー

戦後の日々と鈴子のこと

193

IV

私の中の「ふるさと」

207

池野巖さんの装幀

213

草野心平さんを憶う

218

『私の東京地図』のこと

222

「女性作家十三人展」のこと

228

プラハ、カレル橋

235

浴衣

239

銀座のひと

241

装画 芦川 保

装幀 中島かほる

あとや先き

老いの新年

新しい年をむかえる。みんなに、良き年であるように、とまず尋常におもう。正月はみんなに同じだけれど、それをむかえる気持ちはずしも一様ではなかうとおもうからである。今日まで年齢を重ねてきた自分を振り返ってみても、その年、その年でいろいろな正月があった。めでたい正月だけがあったとは言えない。がそれも、ひとそれぞれの人生である。

とにかく私は今日まで生きて、女の平均寿命八十二歳というのを、その上に四年も重ねた。仕合せなことに、友人たちもいっしょに年齢をとってくれて、というのは妙な言い方になるけれど、いっしょに年齢を重ねた友達が数人いて、そのことはこちらの気持ち

ちも広やかになるものだ。若いときからの親しかった友達は、昨年、俳優の原泉が亡くなって、若いときからの友達というのは、もう無いのだけれど、その後のつきあいの親しい友達も、年齢あまり変わらず、そしてその人たちが今もそれぞれの仕事をしているということ、こちらも励ましを受けるのだ。昨年の終わり近くは、そういう気持ちを何度かした。

昨年十一月の末日には、沢村貞子さんが、俳優の仕事をやめて今後は書きものだけをしてゆく、ということ、その表明をされる集まりがあり、私もその集まりに出席した。沢村さんは俳優のお仕事はやめる、ということなのだけど、これからは書きものを、ということ、それは新しい出発といえた。沢村貞子さんと私は、若いとき、当時、禁止されていたプロレタリア文化運動をいっしょに行ったというつながりがあった、こういう共通の活動をしたということは、その後、日頃の行き来をするということはないにしても、親しい想いの持続するものである。その若い当時、私は仕事をしないで非法法の活動に歩きまわっていたから、生活の上で貧乏をしていた。そんな私は、沢村貞子さん

から黄色い麻の着物をもらったことがある。先日の沢村さんの会で私はあいさつをしたが、そのことを言うつもりでいて、言い忘れた。

沢村貞子さんの会の翌日十二月一日と二日は、国立劇場で、第五十九回舞踊公演があった、この第一日の最後を、井上流の名手である井上里春さんが、地唄、長刀八島というのを舞われた。井上里春さんは、当日のパンフレットに載った紹介で見れば、井上流の家元、八千代さんが四世家元を襲名された折の最初の名取のおひとりで、現在、祇園町での最高の舞い手、とある。私は当日、国立劇場で里春さんのその舞いを拝見した。ふだんは柔らかな感じの里春さんが、長刀八島を舞われるとき、きつ、とした表情になって、それが長刀八島の舞いの真髓なのだろう、と私もおもしろい、引き入れられて見た。

里春さんに私がおつきあいを得ているのは個人的な御縁もある。里春さんは昭和五十八年に舞踊批評家協会賞というのを受けられたが、このとき、私の次女の佐多達枝が同じ賞を受けて、里春さんと達枝はいっしょに受賞席に並んだ。里春さんは井上流の舞い、達枝はバレエの創作、振り付けである。この御縁で、里春さんに私も親しくなり、私た

ちの婦人団体が京都の大徳寺でお月見の会をしたときも、里春さんは大徳寺の広いお堂内で舞って下すった。里春さんに私が親しみを抱くのは、里春さんのお人柄の良さにちがいない。確かに、そうおもう。

昨年末は、大阪在住の人形作家、布士富美子さんが新宿の京王百貨店で人形展をなすった。京王百貨店の新宿開店以来、毎年つづいているものである。案内の絵葉書に、木綿の着物に、ちゃんちゃんこを着て、藁沓わらぐつを履いた男女五人のわらべたちが並んでいる。布士さん独特のわらべたちである。その絵葉書に「人形作りはじめて六十余年。夢のように月日が過ぎ、八十二歳となりました。まだまだ楽しみながら制作を続けたいと念じております——」とある。私はこの原稿を書いている今は、まだ布士さんの人形展へ行けないでいるが、明日は行けるだろう、とおもっている。布士さんとは、私はもう久しいおつきあいで、私が大阪へ行けば泊めて頂く仲である。

沢村貞子さん、井上里春さん、布士富美子さんのお三人を私がここに書いたのは、お

三人の年齢のことをおもつてである。沢村さんは八十一歳、布士さんもひとつ違いぐらいでいらっしゃる、里春さんはだいぶ年下であらう、としても、お若いとは言えない。が、それぞれがまだお仕事をつづけていられる。いわば現役である。このことが私を励ます。老齡化社会という言葉の聞かれる日本だが、一般の老齡者からも、その人が希むなら、仕事を取り上げるようなことの無いようにという想いが浮かぶ。老齡の私の新年への想いは、貪欲であらうか、と自分でおかしい。

(一九九〇年一月一日・朝日新聞)

正月に思う

正月というものは、ものごころついた子供の頃にいちばん楽しくて、その後は、若いとき、つまり青春の年齢へとつづきながら次第に年を重ねるにつれて、もうわずらわしくさえなっていくたりするのではなからうか。自分のことでそんな思いをする。正月の思い出といえ、子供の頃をすぐ思い浮ぶからである。昔のときは、ふだんは楽しいということが今ほど多くなかったから、正月は一層格別だったようにおもう。「もういくつねると……」という歌は、子供にとって切実に、正月を待つところをあらわしていた。今の子供たちも、「もういくつねると……」と、正月を待っているのだろうか。私には曾孫どもが六人いるが、身近かにいるのに一度訊ねてみたい。子供にはやはり正月はた